夏秋表

道造

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夏秋表

【Ｎコード】
Ｎ４２１１ＢＡ

【作者名】
道造

【あらすじ】
ＡＩＲ短編。
タイトル元ネタは立原道造の「夏秋表」より。

夏に――ウチはふたつのさびしい虫のいのちと交感を持った。

「蝉さん、つかまえた」
「ほう、やるやん」

そのウチのひとつは、観鈴がその手に抱きかかえている蝉だった。
虫かごや虫取り網を買った覚えは無い。
ねだられた事も、押入れにしまってあった事もないはずだ。つまり、手づかみで捕獲したということ。
何の障害も無い、アスファルトで舗装された道を、ただ走っただけで転ぶ。
まるで風切り羽を奪われた、飛べない鳥のように。
恐ろしいまでに運動感覚の無い――とろい、この子が手掴みで素早しっこい蝉を捕まえたのは感嘆していい事だろう。

「地面に落ちてたの」
「むっちゃ死にかけやないか」

やっぱ、あかん。
ウチは心でそう一言呟いた後、またうちわで自分の顔へと風を送る作業を開始した。

「死にかけ？」
「……まー、もうすぐ死ぬやろなあ」
「が、がお……」

白い、子供用のワンピースに身を包んだ観鈴は、涙目になって蝉を

見る。
じいじい、と蝉が答えて鳴いた。
蝉の種類はなんだったか――あまり興味がないので、まあいい。
ともあれ、ウチは冷たく突き放した。

「捨ててきい」
「……」

観鈴はじい、と悲しそうに蝉を見る。
だが、見たところで助かるわけでもなく。
さっさと捨てさせるのが、観鈴を悲しませないためには好ましい判断といえた。
たとえ嘘を吐いても。

「――どこぞの木にかけてやり。ひょっとしたら、生き返るかも知らん」

無理だろうが。
夕飯の頃まで生きながら得てくれれば、それでいい。
そうすれば、あの子は悲しまずにすむはずだ。
ウチは、庭から玄関を出て――防波堤の並木道に走っていく観鈴の姿を見送った。
微かに、観鈴が泣かない事を祈りながら。
そう、ウチは祈る事以外には許されていなかった。
蝉の結末は知らない。
あの夏は、いつの夏だったか。
それはとても古い思い出で――子供の観鈴はまだ手がかかり、少しはあの子に優しく出来た頃の夏。
ウチは、あの寂しい命との出遭いを終えた。

もうひとつは、また別の夏だった。
――あの時、蝉を大事そうに手で抱きかかえ、ウチの目の前に運んできた。
あの子が、優しいウチの娘が、いなくなってしまった夏だった。
あの頃の記憶は曖昧だ。
朝、死んだように目覚め、夕、死んだように海や防波堤をぶらつき、夜、死んだように眠る。
おそらく、今は辞めた仕事先から、または敬介から、毎日のように電話がかかってきていたはずだが。
どうでもよかった。
実際、何かの拍子があれば、死んでもかまわない、と考えて過ごしていた頃。
夏の終わりか――ひょっとして、もう秋だったのかもしれない。
確かなのは、あの日、ウチの中での夏が終わったということだ。
ウチはその日、もうひとつの寂しい命に出会った。

昼を過ぎた頃。
ウチが、いつものように防波堤へと歩いていく最中。
道端に、蝉が転がっていた。
感傷の小曲をうたいあげる夏蝉は、すでに数を減らしている。もはやウチの庭にて鳴く声は聞こえない。
その蝉も、やはり夏の終わりを告げるように地面へと這い蹲っている。
寿命か、餌を欠いたのか。
それとも仲間を亡くした寂しさゆえか。
ともあれ、これがこの蝉の運命だったのだろう。
ウチは残酷なことに、それを放置した。
夏蝉の一匹など、省みるに値しない。

事実、ウチでなくとも、多くの人間が同じ事をするだろう。この田舎町の、素朴な人間でも――
だから、自分で羽ばたく事の出来ない弱い蝉など、蟻にでも食われてしまえばいい。
どうでもいいことだ。

「死んでまえ」

朽木のように枯れ、地面にとけてしまえばいい。
そんな醜い感情にとらわれた。
呟き捨てた後、また歩き始め、海へと向かっていった。
ウチは観鈴がいなくなってしまってから、忘れる事もなくあの子の事を考えていた。
一秒も、忘れることなく。
早朝の風に声を聞く。跳ね起き、目覚めた朝にあの子の部屋のドアを開く。
埃のつもったベッド、物言わぬ恐竜の人形、遺品のように添えられた、あの居候の人形。
夢の残骸。
夢から覚めるように、また死んだようにして居間へと歩いていく。
扇風機の風を浴び、瞳を乾かす。
涙など出ぬように。
庭の草木がざわめいたのを感じ、ゆっくりとスリッパを履いて居間から庭へと出て行く。
いない。
どこをさがしても、いないのはわかっている。
それを確認した後、そのまま玄関へと歩いていく。海に向かうために。
そして、少しばかりの並木道を越え、こうやって防波堤に一人で立ち。

いつか見た、あの子が同じようにしていたように。
遠巻きに見た、あの輪郭をまねするようにして手を広げる。
物悲しい夕暮れが訪れるまで。
たとえ観鈴のことを忘れたいと思ったとしても。
そんな日々のおりに、思い出してしまう事はわかっているのだ。
だから、そのままにしておいた。
ウチは未だ、死んだように日々を送っている。

たまに、そうして防波堤にいると、背に声がかかる事がある。
小さな、子供の二つの声だ。
しのさいか、まいか、という二人の少女。
あの、いつかウチが買った「なまけもののぬいぐるみ」を持っていて一瞬息を呑んだが。
観鈴と、あの居候に譲ってもらったものらしい。
何故だか、この二人の少女は防波堤でたまに話しかけてくる。
どうやら母親が仕向けている事のようだ。
ウチがあの子を亡くした事を知り、それを気遣っての事だろう。
ここは、優しい町だ。
そして、ウチの娘も優しかった。
ウチの娘が――とけこむことはできずとも、それなりに生きてこれたのは、どちらが優しかったせいか。おそらくは両方か。
ともあれ、あの娘がこの町で育った事は正解だった。
あの娘の父親も、その点においては慧眼といっていい。
優しい証拠だ。
そして、観鈴の事を真剣に考えてくれて、今はいなくなってしまったあのぶっきらぼうな居候も。
おそらくは、観鈴にとって誰よりも優しかったに違いない。

――優しくないのは、ウチだけだ。
母親として接する事ができたのは、たったひと夏。
いや、それすら短い、蝉の命のような短い期間しか。
ウチはあの子に優しく出来なかったのだ。
もはや、死んでしまった事は諦めている。
諦められないが、諦めるしかなかった。
ウチの中で、何処か、そういう感情が芽生え始めているのだ。
まるで、あの娘の残り香がそれを許容しているように。だから、それに抗うことはしない。
後を追う――自殺することも考えられなかった。
ただ、死んでしまった事に対しての後悔が消える事はなかった。
諦観と、後悔の感情が矛盾し、ウチの中を荒れ狂っていく。
愛をあげたのに、愛をあげようとしたのに。
全ての愛をあげようとしたのに。

観鈴は、死んでしまった。
これからの希望、家族としての生活、共に生きるということ、手をつなぐということ、視線を合わせること、存在を確認するということ。
愛をあげるということ、愛をもらうということ。
何もかも叶いはしない。
絶望、孤独、消滅、破綻、空虚、逝去。
ひとり、また堤防で嗚咽する。
抱きかかえた身体は信じられないほど冷たく、挙句の果てには震えが止まらなくなる。
ただ、悲しかった。
すでに昼は過ぎ、夕も過ぎ、やがて夜の時間を海は迎えていた。防波堤にならんだ街灯が寂しい色を光らせて、立ち尽くすウチを照らしている。
このまま朽ち果てて、地面にとけてしまいたかった。

地獄だった。
どうしてこれほど悲しいというのか。

未練だ。
結局は、その言葉で片付けられる。
これからの生活を、観鈴と暮らすはずだった日々を思い描いて、その幻をウチは求めて足掻いている。
だが、幻は幻に過ぎず、そんなものはどこにもない。日々はその事実を知らしめて、ウチを苦しめるだけだ。
これからだったというのに。
伝えたい事は、まだ沢山あったのに。
傍にいた十年間、ウチは何も出来なかった。
想い出は全て残酷な光景。ウチが観鈴に優しくしてあげられなかった、という事。
それだけが幻で繰り返されていく。
――あの、夏の事も。
ウチは、あの夏の事を思い出した。
蝉を大事そうに抱えた少女。
冷たく跳ね除けた、母親。
観鈴に優しくしてやれなかった、一つの光景を。

――あの蝉は、結局どうなったのだろうか。
観鈴の前で、死んだのだろうか。
観鈴が興味を示しているうちは、生きていてくれたのだろうか。
それとも観鈴の願望のように、息を吹き返し、また夏を謳歌したのだろうか。
闇の中、妙に冷静になって夜の海を眺めた。
眺望は暗く、ただ月明かりだけが水面に反射している。
気になった。
いつしかウチは立ち上がり。

昼間の、あの道端の夏蝉のところへと歩いていく。
それは次第に早足になり。
最後には、走り出した。

気になってしまったのだ。
あの蝉の、最期はどうだったのか。
その最期を、看取る気になった。
愚行といっていいだろう。
きっとあの夏蝉は、既に他の虫の餌になっているだろう。
あるいは、すでに死に絶えて。この夜の寒さにより、地面で冷たくなっている事だろう。
だから、愚行だ。
くだらぬ未練だ。
ただ。
それでも、ウチはこの闇の中を探し続けた。
思い出してしまったのだ。
観鈴と過ごした、あの夏の後悔を。
あの時、せめて一緒にいてやるべきだったのだ。
死にそうな蝉を抱きかかえて、ウチのもとへ頼ってきた小さな少女。
ただ、その記憶を懐かしむように。
ウチはあの子の輪郭をまねするようにして、地面に落ちた蝉を探し続けた。
そして、見つけた。

昼に見つけてからすでに半日を数え、探すのにさらに数刻を数えた後も。
まだ、蝉は生きていた。
身体を仰向けにし、ただ飛ぶ事の出来ぬ空と、残酷な人間の顔を恨

めしく睨みつけていた。
蝉は鳴かない。
ただ、その代わりにウチの荒い息が夜に響いていた。
心臓が鼓動を打ち、血液が循環する。
その生命を伝えているウチの心臓と裏腹に、蝉は微かに腹を大小に膨らませ、縮小させるだけだ。
だが、生きている。
ウチよりも、この蝉はよほど必死に生きようとしているのだろう。
どうせ死ぬくせに。

「――」

また、酷く、醜い気持ちになった。
踏み潰し、息絶えさせたい気分になる。
だが、それはしない。

「――」

拾い上げる。
ウチは両手で、一すくいの水をくみあげるように、それが零れないようにして、そっと蝉を抱き上げた。
そして、今まで歩いてきた並木道を少し戻る。
あの子なら、こうしただろう。
そして、あの夏もそうしたのだろう。
ただ、観鈴の輪郭をできるだけまねるように。
ウチは近くの木へと、身体を寄り添えた。
手の中の蝉は、死んだように動かない。

「――」

もう、死んでしまったのだろうか。
抱いた中の存在は、すでに冷たくなっている。
黙して、夏蝉の身体を木へと移す。
蝉は、力弱く足節を木へとひっかけた。
――いや、実際のところ、ひっかけたというより、ひっかかっただけなのかもしれない。
正直、夜の寒さで皮膚が硬くなっていて、触っただけではもはや生死の判別はつかない。
生きているかも、死んでいるかもわからない。
まるで、ウチのようだ。
と、呟こうとしたが。

「いや、違う」

出てきた言葉は、別なものだった。
自分で呟いた言葉に驚く事は無く、ただ蝉を置き、空いた手で右の二の腕を握り締め、目を閉じる。
この蝉を探している間、ウチは確かに生きていた。
観鈴の思い出にすがり、それも哀れな愚行ながらも。
必死だった。
身体はしかと息をし、生命を称えていた。
この身体は蝉のように、この夏で死ぬわけにはいかないだろう。
思考がそこに至り、また目から涙が溢れてくる。

――ウチはまだ、夏を悲しんでいたかった。
あの子と、同じ季節をまだ生きている、と実感していたかった。
この夏には、全てが詰まっていたと、いま気づく。
観鈴の思い出と、それを回想することを繰り返す日々。
たとえどれほどの苦痛だったとしても、それを続けていたかった。
だが、どうしようもない。

ウチの手は、時を止める術など持たない。
ただ、今は眼前の蝉を見据える。
記憶に、深く塗りこめてしまおう。
観鈴との想い出が詰まっていた、この夏を。
あの時、見ることの叶わなかった想い出を契機にして。
もうすぐ夜が明ける。
闇が薄れ、白い幕があがっていく。
今日が、ウチにとって最後の夏日だ。
やがて秋が定まっていくだろう。
そして夏は跡形もなく消えるだろう。
苛烈な静寂の中、ウチはただ蝉の最後の挙動を待っていた。

了

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4211ba/

夏秋表

2012年1月11日02時49分発行